

(8) ジガバチモドキ亜科 (Trypoxyloninae)

(1) ピソンバチ (*Pison*)

常 木 勝 次

A Guide to the Study of the Japanese Hymenoptera (20)

(8) Trypoxyloninae (1) The Genus *Pison* Jurine, 1808

By K. Tsuneki

Reprinted from The Life Study (Fukui), Vol. VII, No. 3, pp. 48-50, 1964

生物研究 (福井) 第8巻 第3号 48~50頁 昭和39年7月

蜂類研究手引 (20)

(8) ジガバチモドキ亜科 (Trypoxyloninae)*

(1) ピソンバチ (*Pison*)

常 木 勝 次

A Guide to the Study of the Japanese Hymenoptera (20)

(8) Trypoxyloninae (1) The Genus *Pison* Jurine, 1808

By K. Tsuneki

ジガバチモドキ亜科の蜂は、両眼の内縁線が中央上部において強くえぐれて眼内に湾入する（丁度スズメバチ科の蜂に見られるように）ことによって、容易に他のアナバチ科の蜂と区別することができる。また♀の尾節末端は縦稜状となっている。これにジガバチモドキ属とピソン属とが含まれるが、両者は次のような特徴によって区別することができる。

属 の 検 索 表

- 1 前翅の肘室は1個、腹部は長く、第1腹節は多少とも柄状となる *Trypoxylon* Latreille, 1802
- 2 前翅の肘室は2または3個、3個の場合は第2室は有柄である。腹部は特に伸長せず、各節間はやくやくしている *Pison* Jurine, 1808

Pison 属 について

この属の蜂は全体黒色で頭楯と腹節後縁に灰白または淡褐の密毛がある。♀♂の区別は触角節数および腹節数の違いによって容易にできることは、他の多くのアナバチ科のものと同様であるが、なお尾節の形状だけでも可能である。肘室3個のものでは♀の尾節は光っていて背面末端部に短い縦稜がある；♂では先端が巾広く、中央部広三角状の切みがある。また♀の腹面節末端は尖っているが、♂は巾広く両端に各1本の指状突起がある。肘室2個のものでは末端から板状突起がでているが、これが♂では巾広く四角状、♀では巾狭く長形である。この属の蜂の触角は♂でも末端節が変形していることはない。

種 の 検 索 表

♀ ♂

- 1 前翅の肘室は2個（頭楯の先端は♀では円く♂では三角状に突出する、三角部の基部両側に短い平行部がある。腹節間のくぐれは他種より顕著、大きさ7~8mm）。朝鮮・本州。
ヒメピソン *Pison (Krombeiniellum)** koreense* Radoszkovsky, 1887
- 2 前翅の肘室は3個（第2室は上方が柄状） 2
- 2 後単眼と複眼との距離は後単眼間の距離より多少とも大（大形種で12~16mm、翅暗褐色、額に縦の稜はない、♀の頭楯は準三角状に突出し先端に乳頭状付属物がある、♂では直切状）。朝鮮・対馬・本州。

クロバネピソン *Pison (Pison) strandi* Yasumatsu, 1935

(= *Pison iwatai* Yasumatsu, 1935)

- 1 後単眼と複眼との距離は後単眼間の距離に等しいか小（翅はほぼ透明または淡褐） 3

* 実はまだ(7)の *Pemphredoninae* の中の *Passaloecus*, *Stigmns* および *Spilomena* の3属が未解説のままになっているが、これらをしばらく保留して、他の大形のを先に取扱うことにした。次回は *Larrinae* に入る予定である。

** *Paracramius* Radoszkovsky, *Pisonoides*: Turner (nec Smith) *Pisonoides*: Yasumatsu (nec Smith) はこの synonym となる。

- 3 頭楯の先端中央は四角に突出(♀), 大きさ 11~12 mm. 小笠原島 (♂は不明).
チネジマピソン *Pison (Pison) tosawai* Yasumatsu, 1935
- 頭楯の先端中央は四角に突出しない..... 4
- 4 翅はほぼ透明(頭楯の先端は♂第1図, ♀第2図, ♀の中胸側中脚基部前方部は特に突出しない).
大きさ 7~8 mm. 本州・九州・朝鮮・琉球・支那東部・東南亜一帶.
ツネピソン *Pison (Pison) punctifrons* Shuckard, 1837
(= *Pison suspiciosum* Smith, 1858; = *Pison fabricator* Smith, 1869;
= *Pison japonicum* Gussakovskij, 1937. SYN. NOV.)
- 翅は淡褐色(頭楯の先端は♂第3図, ♀第4図, ♀の中胸部中脚前方部はこぶ状に突出する) 大
きさ 8~12 mm. 支那・朝鮮.
チョウセンピソン *Pison (Pison) insigne* Sickmann, 1895



Pison iwatai および *Pison japonicum* について

検索表中に付記した如く, これらはそれぞれ *Pison strandi* および *Pison punctifrons* のシノニムである。*iwatai* と *strandi* とは同じ論文に書かれ, *iwatai* の方が一般的特徴, *strandi* は変異的特徴を示すものであって, *iwatai* の方が生きるとよいのであるが, *strandi* の方が先に書かれているのでこの方が生き, *iwatai* はシノニムとして消えることになる。多数の標本, 生息状況を調べれば両者が同一種の変異範囲にあることは明瞭である。また1937年に Gussakovskij が書いた *japonicum* は完全に *punctifrons* に一致するので, これも消されなければならない。

***Pison (Krombeiniellum) koreense* Radoszkovsky について**

その名の示すように朝鮮から初めて発見された種であるが, 京都および白山麓からも採集されている。京都のものは1♀だけの記録であるが白山麓には決して珍しいものではなく, 私の手許には後記のように多数の標本があり, なお欲すれば相当数の追加採集も可能である。ところでこの種は第2次大戦後米軍の物資に混入したため北米に運ばれ, 彼地(現在までにわかった所は Virginia, Illinois, Maryland)に住みついたようである。初め米国の専門家を煩まして問題種となったが, 1958年に Krombein がその正体を明らかにした。

原記載では *Paraceramius* という属になっているが後にこれは *Pison* の亜属とされることになり, 時によって *Parapison* Smith のシノニムとされたり (Dalla Torre, 1897), *Pisonoides* Smith のシノニムとされたり (Turner, 1916; Rohwer, 1935) したが, 上記 Krombein はこれを *Pisonoides* と異なるものとして, Radoszkovsky の *Paraceramius* を亜属に下げて復活した (Krombein, 1958 a and b)。しかしこの呼名は先取されていたため現在は *Krombeiniellum* という亜属名に改変されているのである。

調 査 標 本

- Pison strandi* Yasum.: 45 ♀♀ 30 ♂♂, Honshu (Fukui Pr. — 社谷・勝原・打波川流域小池まで — Mt. Haku and its foot, Mt. Akagi, Nikko, Chichibu), 2 ♀♀ 3 ♂♂, Korea (Seoul, Shoyozan).
- Pison punctifrons* Shuck.: 4 ♂♂ 20 ♀♀, Honshu (Foot of Mt. Haku, Nikko), 1 ♂, Korea (Kodaisan), 32 ♀♀ 41 ♂♂, Amami-Oshima.
- Pison insigne* Sickm.: 6 ♀♀ 5 ♂♂, Korea (Shoyozan).
- Pison (Krombeiniellum) koreense* Rad.: 11 ♀♀ 33 ♂♂, Honshu (Foot of Mt. Haku).

生 態

本邦産種の中の2種について生態観察の記録がある。その1は *P. punctifrons* で、台湾での楚南(現在南川)氏の記録(*P. suspiciosum* を用いている)と、本州での片山氏の記録とである。共に葦等の細い筒の中にジガバチモドキと同様の連鎖巣を造ることが報ぜられている。Prey はやはりクモ類の小形種である。もう1種は *P. strandi* で、榊田氏が山梨県で調べたもので、*P. iwatai* の種名のもとに“むし”に出ている。これは詳細な記録であって否が早に協力して入口の番をすることなど述べられている。

福井県では東部の山地に行けば *strandi* は極めて普通に住んでおり、まき棚のまきの虫孔に潜んでいるのが、いくらでも見られる。竹筒をそのような場所に設置すれば、詳しい観察を行なうことは極めて容易である。私の調べたところでは、本種の prey はハナグモの幼態であることが多く、これらは巣中で糸で互に結び合っている。雄が巣の番をするため、寄生虫に犯されることがほとんどない。

なお私のノートには白山麓の三ツ谷で観た *Pison punctifrons* の巣の記録がある。それは屋根にふかされた斜立した葦のすいれに、蜂が下から潜りこんで造ったもので、3個の連鎖室となっており(なお貯食中)、中にやはり小形のクモが多数(1巣24~30)入れられていて、やはり落ちないように糸で綴ってあった。非常におもしろいことは、入口附近の葦の内壁が縦に裂かれ、その部分が割かれて内向き、丁度 trap を逆にしたように入り難く出易いようになっていたことである。なお隔壁は付近のかまどの泥をとってきて作つたらしく、赤茶けた上の薄い層で、蜂がくっつけた粒々が見分けられた。

なお上記北米で発見された *Pison koreense* の中の Virginia 州のものは、軍で使用した写真用のタンクの中にその巣があり、それから成虫が出てきたのである。巣は泥で作った繊弱な壺で、これがやや斜めに傾いて列をなしていて、中にはクモがつめられていたということである。白山麓でも旧山田屋付近や中宮温泉などで採れるところをみると、そこの人に入り、ヒメベッコウ *Pseudagenia carbonaria* のような生活をしているのではないかと思われるのである。

文 献

- 片山寛之 1934 クロツヤジガバチ (*Pison fabricator* Smith) の観察。昆虫, 8 (4-6), 225-227.
 Krombein, K. V. 1958 *Pison (Paraceramius) koreense* (Rad), 東部合衆国における1新偶産種。
 Ent. News, 69 (6), 166-167 (英文)。
 ———— 1958 メキシコ以北の北米の蜂類。U. S. Dept. Agr., Agr. Monogr. 2, 補訂1。参照ページ 188, 189 (英文)。
 ———— 1963 メアリランド州 Plummers 島の生物誌, 17。Proc. Biol. Soc. Wash., 76, 参照ページ 273 (英文)。
 榊田 長 1939 *Pison iwatai* Yasumatsu の生態。むし, 12 (2), 114-146。
 楚南仁博 1925 数種のコンボソバチ類の観察。動物学雑誌, 37, 226-240。
 矢野宗幹 1932 日本昆虫図鑑(北陸館), 第1版, p. 180。
 安松京三 1935 日本帝國産 *Pison* 属。日本動物学イ報, 15 (2), 227-238 (英文)。
 ———— 1939 日本産 *Pison* 属補遺。Strand 教授還暦記念出版, 第V巻, 81-84 (日文)。
 ———— 1950 日本昆虫図鑑, 第II版, p. 1467。